

現代イスラーム文化と日本社会

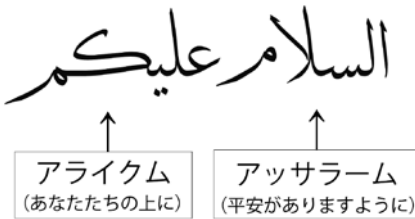
小杉 泰

はじめに——サラーム(平安)のあいさつ

きょうは「現代イスラーム文化と日本社会」という
題で、現代におけるイスラーム文化がどのようなもの
なのか、そして日本社会からそれをどう見るべきか、
といった点について、お話しさせていただきたいと思
います。

アラビア文字が書かれた「サラームのあいさつ」を
ご覧ください。

サラームは平和、平安という意味ですので、「平安の
あいさつ」と訳すことができます。アラビア文字は右



サラームのあいさつ

から左に書きますので、右から「アッサラーム・アラ

イクム」と読みます。

これがイスラーム圏のあ
いさつです。もともとアラ
ビア語で、誰か人と会った
ときに「アッサラーム・ア
ライクム」、つまり「アッサ
ラーム(平安)があなたたち
の上にありますように」と
言います。「アッサラーム」
は「平和」「平安」「安全」

などを意味します。

このあいさつ言葉には、返事があります。「ワ・アライクムツサラーム」と言います。「ワ」は英語の「アンド」に相当します。次に、相手を強調して「平安が」と「あなたたちの上にありますように」を逆にします。初めに相手から「平安があなたたちの上にありますように」と言われましたので、返答は「そして、あなたたちの上にも、平安がありますように」と答えるわけです。

皆さまと、このあいさつを実践してみましよう——「アッサラーム・アライクム」「ワ・アライクムツサラーム」。ありがとうございます。皆さまにも、これで一回、アラビア語の会話を体験していただいたことになりました。

アラビア語は、イスラームの聖なる言葉、聖典の言葉として、イスラーム圏に広まりました。イスラーム圏と一口にいつてもアラブ人以外もたくさんいますが、少なくとも、あいさつはこの言葉をどこでも使っています。

イスラーム圏とはどこか、という問いを立てた場合、いろいろな答え方がありえます。たとえば、イスラーム教徒（ムスリム）が住民の多数を占めている地域。国際機構としてイスラーム諸国会議機構（OIC）が1969年に設立されましたが、そのメンバーは国連加盟国で主権国ですので、そのような国がイスラーム圏を構成していると考えられることもできます。また、憲法に「イスラームが国教」と明示している国もあって、それがイスラーム国であるという議論もあります。おそらく、現地に接する感覚から一番わかりやすいのは、この「サラームのあいさつ」が通じるところ、という定義ではないでしょうか。

そうしますと、たとえばアラビア半島の人が重々しく「アッサラーム・アライクム」と発音しても、別な言語圏で少し現地風の発音になっているところがあつたとしても、そこで「アッサラーム・アライクム」と言つて通じるのであれば、イスラーム圏と考えることができます。

日本は、古来いろいろな文明を取り入れてきました。

イスラーム文明は、私たちの文化交流の歴史の中ではなじみが薄いわけですが、いまから「もしイスラーム文明から何か一つだけ取り入れるとすれば？」と聞かれたら、私はこのあいさつをお勧めしたいと思います。見知らぬ人が出会った時の最初の言葉が、まず「平安があなたの上にありますように」であるのは、とてもよい習慣ではないでしょうか。

イスラームはアラビア半島で始まりました。西アジアの一部とも言えますが、西アジアから地中海にかけてのあたり、古代オリエントも含めて、この地域は文明の十字路にあたります。古代以来、さまざまな民族が往来し、民族移動し、いろいろな国が勃興して、言語も習慣も異なる人びとが交流してきました。肌の色も多様です。そのような文明の十字路という側面が、イスラーム誕生の地にはあります。

言語も通じないかもしれない多様な人びとが行き交うところで、人間同士がどうやって仲よくできるかと考えると、まずあいさつが大事です。知らない人と会ったら「平安があなたの上にありますように」と、あ

いさつをする。そうすると、あいさつをされた人も「そして、あなたたちの上にも平安がありますように」と返答する。このあいさつのルールは、ある意味で「生活の知恵」と言えるかと思っています。古くから多民族が混交し、文明の十字路になっているところだからこそ生まれる、友好と安全のための知恵と言いましょか。文明の十字路ならではの固有の発想があるのだろうと思います。

アラビア語に惹かれて40年

アラビアの文字を1つ書いてみます。

これはアラビア語の「ラーム」という文字で、ローマ字でいうとL。図をご覧いただくとおわかりのように、鏡を真ん中に立てて映ったかのように、左右対称になっています。私はこれを「鏡文字」と称しています。ローマ字が鏡に映った時の文字に見える、という意味です。

もう1つご覧に入れます。Gのように見えますが、アラビア文字が「鏡文字」であると思うと、Gではあ

りません。これはJにあたります。

J | L
鏡

ラムとエル

ج | J
鏡

ジムとジェイ

このような感じで、アルファベットを全部ご覧になれるといいかもしれませんが、すべてが一目でわかる「鏡文字」というわけにもいきません。一番わかりやすい2つをご覧いただきました。

なぜ、これほどまでに似ているのかといえば、理由は簡単で、もともと同根だからです。アルファベットの起源は古代エジプトの象形文字です。エジプトの象形文字は、漢字の起源と同じように、モノや考えをいろいろな形で表現していました。字の形も、神聖文字と言われていた時代は、非常に複雑です。しかも、古代エジプトでは石に文字を彫っていましたから、文字を刻む作業は大変だったでしょう。

それが次第に簡略化されて、音だけ表す文字がアルファベットとして発展します。東地中海地域のフェニキアでフェニキア文字となり、そこから東西に分かれます。地中海を西に進んでギリシア文字やローマ字に変化する流れと、東のアラビア半島方面に行つてナビタイ文字、アラビア文字となった流れに分かれました。

なぜこのような話を申し上げているかというと、イスラムやアラブ文化は、歴史的な縁の浅さもあって、日本から非常に遠いわけです。発想的にもなかなか理解しにくいことが、いろいろあります。その一方で、私たちはヨーロッパやキリスト教文明については、かなり知識が蓄積しています。しかし、それは交流の長さや密度によるもので、本質的にわかりやすい文化、わかりにくい文化があるわけではありません。イスラーム圏は遠いように思いますが、もともとは西アジアから地中海のあたりのことで、文字にしても、実はヨーロッパと同根の部分があります。

「アルファベット」と言えば私たちは「文字」の意味に理解していますが、「アルファベット」という言い方

は、もともとギリシア文字の冒頭の「アルファ、ベータ」からです。英語で言えば最初のA、Bを並べて「アルファベット」つまり「文字」と言っているわけです。アラビア語では「アリフ、バー」となります。この「アリフ、バー」と「アルファ、ベータ」は、そっくりです。理由は、もともと同じ文字だからです。西欧とイスラーム圏というと非常に異質な世界のように思いますが、「アルファ、ベータ」か「アリフ、バー」か、という程度の違いとも言えます。

ではすべて同じかという点、西欧語は左から右へ、アラビア語は右から左に書きますから、方向が逆ともいえます。同じ部分があるという点では「兄弟姉妹」と表現することもできますが、いくら同根の部分があるとしても、育つに従って人生が違ってくれば兄弟姉妹でも、もの考え方が違ってきます。書き方にしても、右から左か、左から右かで、反対になってしまいました。

ちなみに、起源となっている象形文字は漢字と同じで、一文字一文字が独立しています。簡略化して、音

を表すアルファベットを作った時に、右から書くにしても、左から書くにしても、両方の対応が可能でした。そのため、さきほど見ていただいたように、「鏡文字」という現象が生じたわけです。

日本のほうから見ると、地中海を取り巻く世界は、地中海の北側（ヨーロッパ）にしても南側（イスラーム圏）にしても、それなりの共通性があります。いずれも一神教の世界ですから、それは当たり前かもしれません。

合わせて考えると、同根という側面と反対向きという側面と、両面があると思います。その両面あるという点を踏まえないといけないという点が、現在の日本でイスラーム文化を考えるとときの難しいところであろうかと思えます。

イスラームは日本から見ても、わかりにくいように見えます。そのいっぽうで、欧米などがわかるといえるのは、はっきり言って情報量の差です。日本は明治以来ずっと欧米の文化を取り入れてきたわけですから、分厚い情報の蓄積があります。いまの日本とイスラーム圏の距離は、言ってみれば明治期前半くらいの日本と

欧米の距離感が参考になりそうです。あのころだと、いろいろな人が欧米へ留学したり短期の訪問をして、「洋行帰り」という表現もありましたが、帰国して「ヨーロッパではこうです」「アメリカでは、こうなっています。日本もそんなふうにやりましょう」と論じました。そのとき日本人が皆「なるほど、是非やりましょう」とすぐに思ったわけではありません。欧米のものに飛びつく人もいますが、「たしかに、欧米の方が進んでいるから、そうすべきかもしれない。でも、違和感を感じる」という人もたくさんいました。

どんな文明との交流でも、理解が進み、落差がなくなっていくのには、かなりの時間がかかります。いまのイスラーム圏と日本の距離感は、明治期の欧米と日本の距離感を想像すると、なぜ、わかりにくい面があるのか、判然とするのではないのでしょうか。「イスラームではこうなっています」と言われて、「なるほど、そうか」と思う反面、何か違和感が感じられるという場合、これは情報が足りないからで、情報ギャップが埋まっていくと次第に理解も深まっていくと思います。

プリントに「アラビア語に惹かれて40年」と書きましたが、もともとこのような変わった文字に魅かれて勉強を始めました。いまは京都大学で教えていますが、数えてみると、アラブ研究・イスラーム研究をもう40年やっていることになりました。

個人的な話になりますが、なぜ始めたのかというと、高校を出たときに東京外国語大学のアラビア語学科に進みました。外語大を志望する高校生は中学・高校時代に英語が好きだったりするわけです。私も「英語少年」でした。ところが、これから別な西欧語を学ぼうか、ほかの言語に取り組もうかと迷ったときに、中学・高校で英語を一生懸命やったから「わかった」というのもおこがましいのですが、日本では欧米の言語に親んでいるので、左から右へ書くアルファベットの世界でないほうがいいなと思いました。上から下へ書くのは、日本語をはじめ、東アジアでは一般的です。自分の言葉ですから、十分親しんでいます。下から上に書く文字はありませんので、「右から左へ書く言語を学べば、世界がわかるはずだ」と思いました。相当に単純

な考えですが、それで40年もやってきてしまいいました(笑)。

ところが、当時の日本ではアラビア語など誰も知りません。いまでも欧米語や東アジアの言語のようにはなじみがありませんが、それでも、NHKテレビでアラビア語講座が放送されるようになりました。その番組が始まったとき、本当にうれしく思いました。日本で、そんな時代が来るとは、アラビア語を始めたころは思いもありませんでした。

40年前は「アラビア語を始めました」と言っても、「物好きだね」というくらいに反応しかありません。ところが、1973年にいわゆる「石油ショック」が起りました。第四次中東戦争を機会にアラブ産油国が石油戦略を発動したのが原因です。日本はアラブ産油国と友好関係にあると思っていたのに、ある日「アラブの大義に理解がない」と批判され、日本への石油輸出の削減が宣言されました。経済面で友好的でも、政治面ではそうではない、と言われたわけです。日本は、政治と経済を結びつけるアラブ外交にも驚きました。

そのため、日本は親アラブ政策を採用しますが、それはアラブ産油国に対する「アブラ乞い外交」などと揶揄されました。石油ショックが生じた途端に、日本でもアラブが注目されるようになったわけです。

それまで、アラビア語を始めたと言うと、「何の意味があるの?」と聞き返されるくらいでしたから、石油ショックのおかげで雰囲気が大きく変わったことは間違いありません。幸いにしてアラビア語の評判もよくなったので、物好きで始めたにしては役に立つかもしれないという感じになりました。

ただ、日本にいてもなかなかアラビア語を使うチャンスがありません。現地に行きたいと思つて、エジプト人の客員教授の先生に相談しました。「先生、アラビア語を話している国に行きたいんです」と申しましたら「それならば、エジプトに行きなさい。エジプトの国費留学生の枠があるから申し込みなさい」と言われて、幸い招聘留学生に採用されましたので、エジプトに行きました。

イスラーム世界のホスピタリティ

イスラームの国がいくつあるかについては、いろいろな数え方があります。先ほど触れた「イスラーム諸国会議機構」の加盟国は57。この場合は、パレスチナを国と数えています。自治政府で独立国家になっていませんので、パレスチナを「地域」とみなすならば、国家56+1地域です。その他にムスリムがマイノリティでそれなりにたくさん住んでいる国があります。私の勘定では50ぐらいあります。合わせると、世界中でイスラームと関わりの深い国は110ぐらいあることになりました。国連に加盟している世界の国の数は193ですから、その3分の2くらいにあたります。そのうち私がいままでに行ったイスラーム国が30。それ以外にイスラームがそれなりに存在している国が13くらいでしょうか。合計で43程度ですから、分母を110とすると、その3分の1ほどです。

若いときは全部行ってみたいと思っていましたが、最近ではあきらめて、もう少し数を増やしたいという程

度の気持ちになっています。私が知っている「イスラーム世界」、あるいは私が「イスラームはこうだと思いません」というときは、基本的にそのような国々を訪問しているいろいろ見たり、そこに住んでいる人びとと話をしたりして、考察を重ねてきた結果です。

私が一番初めに訪れたのはエジプトで、ここには結局8年間滞在しました。そうすると、私がイスラームを考えた場合の原点は、どうしてもエジプトが基準となります。エジプトはイスラーム国ですから、そこでの見聞や体験をもとにして「イスラームとは、こういうものだろう」と思っていると、他のイスラーム国へ行くと違うところがあります。新しい土地に行くたびに、「ここが違う」と驚いたり「このあたりはよく似ている」などと思います。そのような観察などを蓄積しながら、共通の要素や異同を判断し、イスラームとは何かという一般論を組み立ててきました。もちろん、たくさんの人びとがこれまでも研究しているわけですから、文献も読みます。イスラーム圏での出版も盛んですから、読むべき文献はたくさんあります。しかし、

本を読んで鵜呑みにはできません。現地での調査や体験は非常に重要です。

いまになって振り返って考えると、エジプトに最初に行ったのは本当に幸運だったと思います。なぜかという、エジプトの皆さんは非常にフレンドリーというか、人間関係や会話の仕方が開放的なのです。開放的なほうがいいとか、日本人のようにシャイがいけないということはありませんが、外国人が留学してその国の社会を知りたいというときは、開放的だと楽です。

見知らぬ人でもすぐに話しかけてくれますし、話しかけても、誰もがちゃんと対応してくれます。日本人は珍しいですから、「どこの国？」などとすぐに声をかけてくれます。その上、声を交わして少し知り合うとお茶をおごってくれたり、食事に誘ってくれたり、果ては「ホテルは高いから、うちに住みなさい」と言うてくれます。ホスピタリティが非常に強い社会です。

最初は、エジプト人が開放的だからホスピタリティが強いのだと思っていましたが、他のイスラーム国へ行っても、もてなし上手で、似たような経験をします。

性格的に開放的ではなく、比較的シャイな文化でも、ホスピタリティはイスラーム圏に共通しています。

なぜか、初めはわかりませんでした。結論から言えば、イスラームの教えの中に、旅人や異邦人にやさしくしなさい、という教えがあるのです。ホスピタリティとは、お客に対するもてなしですが、「よそ者」だからこそ「客」になるわけです。その考え方では見知らぬ異邦人ほど、お客さんとなるに適しています。この発想は、さきほど申し上げた「サラームのあいさつ」と同じで、多様な文化、さまざまな異民族が交流するような「文明の十字路」で、いかに互いに仲よくするかという知恵が込められていると思います。「よそから来た見知らぬ人だからこそ、もてなします」というのは、実は非常に合理的ではないでしょうか。

「人と仲よくする技術」も「文明」

そのような体験を重ねて、私が思うようになったのは、「文明とは一体何か」ということです。私たちはいま「文明」を思うとき、文明とは高度な科学技術をも

っていると考えます。たしかにその面は大事ですが、科学技術というときに、私は2種類あるだろうと思うのです。1つは、まさに、普通に「テクノロジー」と呼ぶもの。私たちは、近代的で非常に便利な生活をしています。それを支えているテクノロジー、科学技術があります。そのいっぽうで、「社会運営のテクノロジー（技術体系）」もあるのではないかと思います。たとえば、出会ったら「平安があなたたちの上にありますように」「あなたたちの上にも平安がありますように」とあいさつを交わす。これは技術の1つです。仲よくする技術といえますか。

単に、自然体であいさつが出てくるというのではありません。イスラームの教えとしてルールが確立していて、それを広めていった結果、いまでは16億人がそのあいさつをルールとして体得しているわけですから、これは伝え、修得し、どこの社会でも活用できる技術とみなすことができます。

ところが、20世紀から21世紀の人類を考えると、はたして科学技術が発展したほどに社会運営の技術が進

んだと言えるでしょうか。戦争のテクノロジーは、非常に発展しました。悲劇的なほど発展したと言えます。そのいっぽうで、いろいろな民族がいる、いろいろな国があるなかで、仲よくする技術はそれほど進んでいません。だから、いつまでたっても紛争がなかなかくならないのだろうと思います。文明を考えると、そのような面もよく考えなければいけないと思うようになりました。

エジプトから日本に帰って来て、最初に『エジプト・文明への旅』（1989、NHKブックス）という本を出させていただきました。いまは絶版ですが、これは書名のように「エジプト・文明」への旅であって、「エジプト文明の旅」ではありません。

なぜかという点、「エジプト文明」というとピラミッド、スフィンクスの古代エジプトが想起されます。私がこの本で言いたかったのは、エジプトは古代文明もあつたし、キリスト教文明の時代もあつたし、イスラーム文明の時代もあつたし、いまだって社会運営の技術を見れば非常に高い文明力がある、ということなのです。

科学技術だけが文明ではなくて、人間がいかに摩擦を避け共存できるかという社会運営の技術も文明の重要な側面だということを描こうと思ひ、このような題名にしました。

多様なのに「統一性」——どこから？

いまのイスラーム世界をざっくりご紹介すると、人口で言えば世界人口のおよそ4分の1、23%とかわれていて16億人ほどです。まもなく世界人口が70億人に達しますが、その4分の1よりわずかに少ないというくらいがイスラームの比率です。

国の数を先ほどご紹介しましたが、太平洋、日本からみるとフィリピン南部から始まり、マレーシア、ブルネイ、インドネシアのあたりが一番近いイスラーム国です。さらに西へ進めば、南アジア、中央アジア、西アジア、北アフリカと続きます。ところが、大西洋のさらに向こうの南アメリカにもイスラーム諸国会議機構に入っている国があります。スリナムとガイアナです。移民を通じて、イスラーム人口が広がってきました。

した。

さきほど、「アッサラーム・アライクム」が通じるところがイスラーム圏、という定義の仕方を申し上げます。その定義に従うと、ヨーロッパの中にもイスラーム圏があります。パリに行くと、アルジェリアやモロッコから来た移民と、その二世・三世が集住している地域があります。そこでは、アラビア文字でレストランや店の名前が書いてあります。ロンドンにも、そういう通りがあります。その通りでは、新聞スタンドでもアラビア語の新聞ばかり売っています。私はロンドンに行くのと、とりあえずその通りに行つて最新のアラビア語新聞を買い求めます。

アメリカでも、ニューヨークではタクシーの運転手さんにイスラーム圏の人が多という状況があります。アメリカは移民国家ですので、移民してきた順に社会的に上昇するということがありますが、イスラーム諸国からの移民は比較的新しいので、自動車の運転ができればタクシー・ドライバーになっています。イスラームでは金曜日のお昼にモスクで集団礼拝がありますの

で、その時間帯にはタクシীর数が減ってしまいます。「金曜日の昼頃は気をつけないと、タクシールがつかまらない」という状態が、イスラーム国ではないのに生じています。

宗教としてのイスラームは、イスラームに帰属する人が移動すると、それとともに広がりますので、歴史の中で次第に拡大してきました。近代になって、欧米に移民がたくさん入る時代となると、欧米にも広がりました。最近では、9・11事件以降、欧米ではイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）が顕在化して問題になっていますが、そのようなことも含めて、イスラームが世界に広がっていることがわかります。

人口から見ると、いま最大のムスリム人口があるのはインドネシアです。イスラームといえばアラブという印象があるかもしれませんが、たしかに生まれた場所はアラビア半島ですし、イスラームの拡大と共にアラブ人も増えましたが、イスラーム世界全体を見るとアラブ人は5分の1程度です。残りの5分の4は他の諸言語を話す諸民族です。人口では2番目に多い国がパ

キスタン、次いでバングラデシュ。4番目は、ムスリムは国内的にはマイノリティであるインドです。もともと「マイノリティ」といっても、インドは総人口が世界第2位と大きいので、ムスリム人口だけでも日本の人口より多いです。それから5番目にアフリカのナイジェリアが来て、その後によく中東の国が、エジプト、イラン、トルコと入ってきます。

これが2050年の予測では、イスラームは世界人口のうち29%くらいになるのではないかと言われています。その時に最大なのはパキスタンで、次がインドネシアと順番が変わります。2050年の予測では、世界の人口ランキングでインドが中国を抜いて第1位になります。続いて中国、アメリカ、その次がパキスタンとなります。

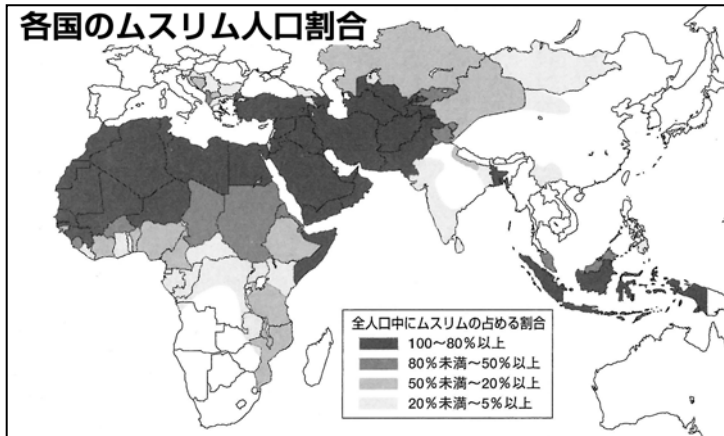
なぜイスラーム諸国の人口がこんなに増えているのか、必ずしもはっきりしない部分がありますが、多くの国にいわゆる「子だくさん」が見られます。なぜ「子だくさん」であるのか、いろいろな議論はされていますが、イスラームがその背景にあることは間違いあり

ません。そう考えないと、全体的な傾向が説明できません。

1950年には、つまり20世紀半ばには、イスラームは世界人口の15%しかありませんでした。この比率が1世紀間で倍になることを考えると、近代化とイスラームが結びついているところに着目する必要があります。世界中の国が近代化していますが、同時にイスラーム国では、イスラーム復興が起きて宗教的な価値観がよみがえっています。

地図を見ていただくと、イスラーム圏に色が塗ってあります。アラビア半島から始まって、東西南北に広がりました。イスラーム世界を語るとき、しばしば「多様性」と「統一性」と言われます。非常に多様な国々があつて、さまざまな文化があります。しかし、それは当たり前と言えば当たり前です。私に言わせると、多様性は一つ一つ見ていくと非常に面白いのですが、珍しいわけではありません。これだけ広域に広がって、国の数も多いですから、多様なのは当然です。

問題は、むしろそのように多様な人びとが、なぜ「イ



青柳かおる著『面白いほどよくわかるイスラーム』（日本文芸社）より

スラーム」として括られているのか、自分たちはムスリムだということと統一性を持つのか、という点です。統一性のほうに、謎があると思います。多様性も真実ですが、たとえばヨーロッパについて「ヨーロッパと一言で言っても、言語も民族も多様です」とは言いません。常識ですから、あえて言うことではありません。

イスラーム世界でも、多様性があるのは当然です。実際、どの国をあげてもいいのですが、たとえばインドネシア人とアラブ人を見れば、非常に違っています。インドネシア人そのものも、国のまともりはあるにしても、日常レベルでの言語や文化はきわめて多様です。ではなぜ統一性があるのかというと、1つの答えは「イスラーム法」が共通の法として存在するということかと思えます。いわゆるイスラームの戒律が、地域や民族の違いを超えています。

戒律は「厳しい」だけか？

いまからイスラーム法についてお話を申し上げます。皆さまも、イスラームは戒律が厳しいと思っていらいら

しゃると思います。そのような印象がふつうです。

そこで、イスラーム法は厳しいという前提で、話を進めたいと思います。イスラームの戒律で厳しいものの代表として、断食があります。イスラーム暦にはラマダーン月という断食の月があつて、1か月間にわたつて断食をします。イスラーム暦は純粹な太陰暦で、新月が空に出たら暦の月も新しくなります。月は29・5日で地球の周りを一周しますから、新月の観測をベースにすると1か月の日数は29日または30日ということを繰り返します。その日数を、ラマダーン月の間は毎日断食します。

ちなみに、このように月齢に従つて暦を運用しますと、太陽暦に対しては日がずれていきます。太陽太陰暦と比べて、調整して太陽暦と1年の長さが合致するようにする暦もありますが、イスラーム暦の場合はそのような調整をしない純粹な太陰暦です。月は29・5日を12倍すると354日になります。1年が354日だと、太陽暦に対して毎年11日ずつずれていきます。

したがって、ラマダーン月も年を追うに従つて季節

がずれていきます。毎年11日ずつずれますと、だいた
い33年で季節をグルッとひと回りします。日本では60
歳で「還暦」ですが、イスラーム圏では「私はラマダー
ンが（四季を）2周した」などと言います。子どもは断
食をしません、思春期くらいから始めますので、た
とえば真冬に生まれて初めてのラマダーンをしたとし
て、1周して真冬に戻ってくれば33年たっていますの
で、45歳くらいになります。80歳くらいのお年寄りに
なると「2周した」ということになります。

イスラームの断食の仕組みは、日の出前から日没ま
で断食を断ちます。日の出と日没の時間は季節によっ
て異なりますが、仮に、きょう日が出るのが朝5時半
だとすると、4時ぐらいから「暁」の刻限に入って、
断食が始まります。だんだん明るくなって、朝、昼と
なって、夕方に日が沈みますが、仮に5時に沈むとす
れば、5時まで一切飲食ができません。いまの仮定だと、
明け方の4時から日没の5時まで13時間、水の一滴も
飲めません。そう聞くと、厳しい感じがします。

冬は断食の時間も短いですし、気候的にも涼しいで

す。夏は時間も長く、大変です。国によっては日中の
最高気温が40度とか45度になりますから、その暑さで
水も飲めないのは非常に厳しい感じがします。

では、厳しいだけなのか、ということを上上げた
いと思います。5時になって、日没がきたとします。
そこで、ある人が、たとえば「私は信仰心が篤いので、
5時でやめずに、もう1時間断食できます。だから、
頑張ります」というとします。実は、これはだめなの
です。戒律は「日が沈んだら、すぐに断食を破りなさい」
となつています。断食を破って何をするかというと、
皆でご飯を仲よく食べます。皆で分け合つて、幸せに
食べなさいという戒律です。

「断食をしなさい」というだけが戒律ではなく、日没
後に仲よくニコニコ食べるのも戒律なのです。「おいし
くご飯を食べてください」と聞くと、戒律のように聞
こえませんが、イスラームはすべてについて教えを決
めていく、ガイドラインを出すのがルールですので、
おいしくご飯を食べるのも戒律ということになります。

ラマダーン月に毎日断食を断つのが厳しいというこ

とでいえば、普通に考えれば、これは苦行です。しかし、「苦行」と言っては説明がつかないのは、イスラーム国へ行くと、エジプトもそうですし、他の国に行ってもそうですが、ムスリムたちはラマダーンが大好きなのです。ラマダーン月の正確な開始日は新月を見るまで決まりませんが、それを決定する日が近づいてくると、「あと2週間くらい」「もう1週間くらい」と、皆が「もうすぐだね」と言い合いながら待っています。町じゅうにラマダーンの待望感が満ちてくるのです。苦行だと思つと、この待望感は理解しがたいです。

実は、一言でいうと、ラマダーンは毎晩がお祭りみたいなものです。日本のお正月に近い感じでしょう。日中は食べませんが、夜は食べます。日没後に食べる時には、皆で仲よく食べます。日本でもお正月に家族が揃つてご馳走を食べますが、それが1か月続くようなものです。どれほど働きのビジネスマンでも、ラマダーン中は出張に行きません。毎日が沈んだら、家へ帰つてご飯を食べます。

レストランは、日中は営業していません。お客がい

ませんので。日没近くなると、レストランはお客で満員になります。家族連れで来て、テーブルに座つて日没を待ち構えます。

レストランだけではなく、歩道にテーブルをズラリと並べて、貧しい人たちに食事を供するところも満員になります。そのようなところは、誰が座つて食べてもいいのです。最近では日本でも旅行会社から、ラマダーンが近づくと「ラマダーン警報」というのが出ます。ラマダーンに行くと、昼間はレストランが開いていませんので「不便です」と教えるわけですが、ラマダーン月を体験するのも面白いかもしれません。皆さまがイスラーム圏を旅行してちょうどラマダーンになって、そのようなテーブルがあったら、座つてみてください。旅行者とみれば喜んで誘つてくれると思います。先ほど申し上げたように、「よそ者」は「お客さま」としてもてなすのがホスピタリティですので。

戒律は厳しいですから、日が沈む1分前でも食べてはいけません。しかし、沈んだらすぐに食べるのがよいことです。自宅でもレストランでも、日没前に食事

の用意を終えて、皆が揃って、日が沈むといっせいに「いただきます！」というわけです。イスラームでは、「ビスミッラー」（アッラーの御名によって）と言って、食べ始めます。

その後は、夜明けまでは飲んだり食べたりしてかまいません。その習慣は国によっても、あるいは都市と地方で違ったりもしますが、宵っ張りのところでは、ラマダーンの夜は社交の時間となります。湾岸産油国などでは、自宅を開放してティー・パーティーをする習慣があります。ラマダーンの夜は友人の家を回って「ティー・パーティーのはしご」です。

私自身の見聞ではありませんが、あるイスラーム圏の国では、村全体で一緒に日没の食事をするという聞いたことがあります。ラマダーンの1か月間、毎日当番の家があつて、村人が全員そこに行つて食事をする。順に回るわけですが、非常に濃密な共同体と言えるかと思えます。

日本では「ラマダーンで生産性が落ちるのではないか」という議論があります。これについては2つの考

え方ができます。工業発展がめざましいマレーシアへ行きますと「いや、能率が落ちる」ということはありません。断食をしながらきちんと働くのが、イスラームの教えです」と聞きます。断食をしているからといって、生産性が落ちてはいけない、という考え方です。

そうでないところも多くあります。そこでは、仕事も大事だが、「ラマダーンは、家族の季節」であるという感覚です。日本でも「お正月を祝っていたら、生産性が落ちる」とは誰も言いません。1か月はお正月と比べると長いですが、家族とご飯を食べたり、聖典を読んだりすることが大事という発想であれば、生産性は主要な問題ではありません。それも考え方だろうと思えます。

さて、戒律が厳しいのかどうかという議論に戻ります。いま申し上げたように、断食そのものは厳しいにしても、食べることは楽しいはず。ラマダーン中は、毎晩、仲よく食べているわけです。しかも、1日断食しているのですから、よほどおいしいだろうと思えます。そうして考えると、戒律は厳しいという見方

は一面的であると言えます。

戒律の厳しさを考えるには、それを実行するのが大変かどうかとは別に、もう1つの面があります。それは全員同じにする、戒律は一律でなければいけないという意味での厳しさです。

たとえば、「インドネシアではお祈りは日に3回にします」というようなことは起こりません。礼拝は「1日5回」となれば、世界じゅうどこへ行っても5回です。ラマダーン月は1か月間の断食といえ、世界じゅうどこへ行ってもラマダーンは断食です。これは共通のルールの厳しさです。内容が厳しい、厳しくないにかかわらず、「同じことをする」ことを重視することです。これが、イスラーム世界の統一性につながっています。

たとえば、「ワールドカップ」を思い浮かべてもいいかと思えます。サッカーは世界じゅうが同じルールだから、皆で試合ができるし、一体感が出ます。日本人が「悪いけど、うちは手を使いますので」と言っているのは、ワールドカップは成立しません。同じように、

イスラームでは日々の礼拝は1日5回といえ、どこへ行っても、どの国でも、それこそ欧米に移住しても、1日5回です。断食の月になれば断食をして、日が沈んだら仲よく食べます。この統一性が一体感を生むのだらうと思います。

しかも、その一体感には、弱肉強食を否定して、敗者復活を推進するよさがあります。断食の日に日没になったときに「食べる物が無い人は、どうぞ、この歩道のここにテーブルがありますよ」という仕組みが、イスラームのよさとして評価されているのではないのでしょうか。

日本でのイスラーム理解の深化

続いて、「日本のイスラーム理解」についてお話しします。最初に、日本から見るとイスラームは遠いということを示しました。日本でも「イスラームに対する理解が足りない」という議論があります。私は「理解が足りない」という見方には、あまり賛成ではありません。そもそも異国のことは、最初はお互い何も知

りません。日本も、昔はアメリカのことさえ知らなかったわけです。

イスラームについても、最初は知識がないのが当然ですし、昔は間違った情報もありました。私が勉強を始めたころ、40年前はイスラームをふつうは「回教」と呼んでいました。「マホメット教」「回々(フイフイ)教」という言葉もありました。いまは、そのような呼び名はすたれて、きちんと「イスラーム」と言います。音を延ばすか延ばさないかの違いはあります。アラビア語に忠実に書くと「イスラーム」と延ばし、音が入りますが、「イスラム」という表記も残っています。日本人が耳で聞くと、どちらもありえますが、違いと云えばその程度です。今の大学生の年齢だと、もう「回教」という言葉自体を知りません。

ムハンマドもかつては「マホメット」でしたが、いまは「ムハンマド」と書かれるようになりました。かつては「アラーの神」と言っていました。いまは「アッラー」と言います。「アラー」では発音が間違っているということもありますが、「アラーの神」は多神教的

な表現なので、誤解が生じるという面もあったかと思えます。

それから、聖典の「クルアーン」は、以前は「コーラン」と言わないと通じませんでした。いまは半分くらい「クルアーン」というように直ったかと思えます。学術的な分野ではほぼ全部が「クルアーン」と表記されますが、普通の方には「クルアーン」ではまだ通じない時があつて、「コーラン」が使われます。

あとは聖地の名前です。「メッカ」は「マッカ」、「メダイナ」は「マディーナ」と、正しい発音に変わってきました。

このあたりを見ると、この30〜40年の間に、はつきりといい形に変わってきました。いま申し上げた5つは非常に大事だと思えます。というのは、これは「自称」ですから。イスラーム圏が自分たちの宗教を何と名前前で呼ぶか、自分たちが崇拜している神を何と呼んでいるのか、宗教を始めたのは誰か、そして聖典の名前、彼らが聖地としている場所の名前。この5つは、イスラームの自称にあたります。他の用語は、日本語でど

う発音するか、歴史的な経緯や日本的な把握の仕方もあるか、あつていいと思います。ただ、他者が自分で名乗っている名前ばかりと言わないと、相互理解も友好も成り立ちません。たとえば山田さんという方を、間違つて「山川さん」と呼んでいたら、よい人間関係を築くことはできません。

同じように、「回教」や「マホメット」と言っているのは正しい理解になりませんが、実際には、30年ほどの間に日本語でも「イスラーム」「ムハンマド」「アッラー」がスタンダードになりました。これは理解が進んだことを意味しています。私は、この意味では日本ではイスラーム理解が急速に進んできたと思います。「足りない」と言い出せば、どの文化についても「これで十分」というところに達することはありません。しかし、日本は世界文明に対する感受性が非常に強い国ですし、イスラームについてもうまく進んでいると思います。

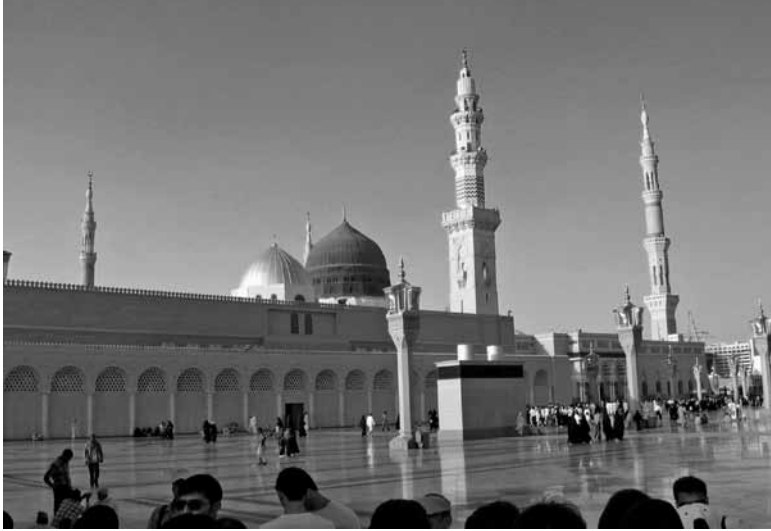
40年前に「回教」とか「マホメット」と言っていたのは、単に知らなかったからです。かつては中国経由やヨーロッパ経由の名前を受け入れていましたが、そ

れは情報不足の時代ですから、やむをえない面があります。ところが、よくよく本人たちとつき合ってみると、違うということが判明して、変えたわけです。非常に順当な流れですから、イスラーム理解について、日本は非常にうまく進んでいるというのが私の意見です。

預言者ムハンマドの重要性

次はムハンマドの話です。イスラームでは、ムハンマドの存在が非常に重要です。イスラームの根本教義は「2つの信仰告白」に代表されます。あるいは「信仰証言」と訳すこともできます。「告白」という訳は間違つてはいませんが、個人的な気持ちのこのような印象を与えます。「証言」は人前で証言するという社会的な意味を含んでいます。第1は「ラー・イラーハ・イツラッラー」、つまり「アッラーのほかには神なし」ということを、「私は証言します」と言います。第2は「ムハンマド・ラスールッラー」、つまり「ムハンマドはアッラーの使徒なり」と、これも「私は証言します」と公言するのが信仰証言です。この2つを言うのと、その

人はイスラームに帰依したことになります。



サウディアラビアのマディーナにある「預言者モスク」。百万人を収容できる。
ムハンマドの墓廟もある（中央のドームの下）

1 番目の「アッラーのほかには神なし」ですが、「アッラーはイスラームの神」と書いている本がありますが、違います。アラビア語で「唯一神」のことです。アラブ人はクリスチャンも、自分たちが信じる神を「アッラー」と言います。英語でいうと「ザ・ゴッド」に相当するわけで、イスラームだけの神ではありません。

中東ないしはオリエントあたりの一神教に共通の神は、アラビア語では「アッラー」になるということです。ヘブライ語では「ヤハウェ」かもしれませんが、それは言語の違いで、一神教の神が宗教によって異なるということはありません。逆に言うと、唯一神を信じるだけでは、イスラームの特徴が出ません。イスラームが他の一神教と違うのはムハンマドが出てくるからです。

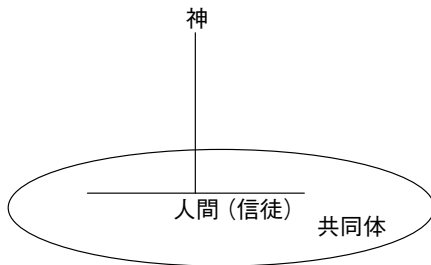
イスラームは「ムハンマド的な宗教」とも言えます。どこがムハンマド的かというと、まず、聖典であるクルアーンは、ムハンマドが「神の啓示」としてもたらしたものです。一般的に神の啓示というのではなく、ムハンマドを媒介とした啓示が聖典になっている点で

す。次に、ムハンマドは単に啓示の媒介というだけではなく、その行いが信徒の模範となっています。

では、ムハンマド的な教えとしてイスラームとはどのようなものなのか。これから、それを少し考えたいと思います。

いま申し上げたイスラームの根本教義の第1は「神は唯一である」ということです。それを信じるということは、人間と神が直接的に契約することを意味します。図では、それを垂

直の関係として表しています。人間が神と契約することは個々人の問題のようにですが、それだけにとどまらず、そのような人たちが人間同士の関係を持つ共同体が生じます。これを水平の関係としてとらえることができま



神との契約（垂直軸）と共同体原理（水平軸）

す。「唯一神と人間の契約」は究極的には個人の問題ですが、そのような人びとが複数いることで、その人たちの共同体という次元が生じます。垂直軸と水平軸の2つが基本の軸となります。

共同体の長といいますか、模範となるのがムハンマドです。ここから、「ムハンマドを神格化しない」という原則も出てきます。神は唯一であり、ムハンマドはどれほど偉いとしても「ただの人間にすぎない」という発想となります。人間は神の前で平等ですから、共同体の成員は皆、平等であると考えます。

ただし、「イスラームは人間を平等にしようとする教え」という説、つまり、経済的・社会的な平等を実現しようとしているという説がありますが、それは少し違うのではないかと思います。そのような説に立った上で、「人間は平等だ」と言うけれども、イスラーム圏には大きな経済的格差があるではないか、という批判や質問が出ます。私の考えでは、イスラームは人間を平等にしようとしているのではなく、根本的に「人間は平等」と断言し、それを信徒の信条にした教えだと

言えると思います。

つまり、ムスリムは皆「人間は平等」と心の底から信じている。社会的格差がいくらあっても、地位の高い人や貧しい人がいても、そのようなことは人間の根源的な平等性を損なう意味を持たないというのがイスラームの発想です。人間は本質的に平等であり、その認識の上で、経済状態や社会的な理由から生まれる格差はありますが、だからといって人間が不平等になるわけではありません。その場合に、イスラーム的に許されないような不当な格差は止めなければいけないということはありません。しかし、たとえば商売がうまくいってお金持ちになりましたということは、何も悪いことではありません。

「貧しい人が苦しんでいるときには、力を合わせて助けなさい」という考えがありますが、「お金を持っている人から取り上げよう」という考えはありません。「お金があろうとなかろうと、人間はみんな平等なのだ」という考え方があって、その上で、経済的にゆとりがある人は困っている人を助けなさい、それが平等な人

間同士の務めであるという発想をします。

ムハンマドを一言でいえば

ムハンマドがどのような人だったかと言えば、イスラームの開祖ではありますが、それは神の言葉を授けられたので、その言葉を入びとに伝えてイスラームをもたらしたことになります。自分でイスラームを唱えたとは考えられていません。そもそも、イスラームはアラビア語で「帰依」の意味なので、アッラーに帰依する、その教えに帰依することを、ムハンマドが伝えたとということになります。

アメリカのある作家が書いた『世界に影響を与えた100人』という本では、そのトップにムハンマドをもつてきています。世界に影響を与えた100人を選ぶとなると、だれが選んでも恣意的になるかもしれませんが、この作家の選択では、ムハンマドの後にイエス・キリスト、パウロ、アイザック・ニュートンなどが登場します。なぜ1番がムハンマドか。この作家が言うには、「ムハンマドは宗教にも俗世にも影響を与え

た」ということです。イエス・キリスト、パウロ、ニュートンなどは、宗教なら宗教だけ、俗世なら俗世だけで、ムハンマドのように両方に多大な影響を与えた人物は珍しい、と説明されています。確かにムハンマドという人は何でもやりました。

プリントでは、「ムハンマドを一言でいえば」として、2行半で書きました——「血筋のよさ（アラブ的な血統意識において）、『アミーン（誠実者）』、家庭人（夫・父・祖父）、商業従事者（妻が商人）、遅咲きの天才（？）、預言者、宗教指導者、統治者・政治指導者、立法官、仲裁者、司法官、外交官、戦略家・戦士」ということです。

もう少し詳しく申し上げます。1つは、アラブ的な血筋のよさです。アラブ人は血統を非常に大事にします。権勢があるとか富強という意味ではなく、純粹なアラブかどうかということを重視しますので、そういう意味でよい系譜の一族に生まれました。

それから、若いときは「アミーン」と呼ばれていました。「正直な人」という意味です。そのようなあだ名を付けられるほど誠実な人物とされていたわけです。

（彼が預言者と名のつたときも、当時のマッカ（メッカ）で信じていない人が多かったのですが、「アミーン（正直者）の言うことだから嘘をついているとは思わない。いったいどういふことなのだ」といふかしんだということです。）

そして、家庭人でした。日本の普通のイメージでは、宗教の開祖や宗教者はもう少し禁欲的ではないかと思われるかもしれませんが、ムハンマドは「預言者」と名のつてからも家庭生活をやめません。それで、子どももいるし、孫も生まれました。

次に、商業従事者です。アラビア語では「商人（タージル）」は資本を持って商売にそれを投入する人を指します。ムハンマドの最初の妻が商人でした。家業が商業ですから、ムハンマドもそこで商業に従事していました。

「遅咲きの天才」というところにはクエスチオン・マークが付いていますが、これは私の説だからで、定説というわけではありません。彼がイスラームの布教を始めたときは40歳でした。当時のアラビア半島では、

せいぜい「人生50年」でしょう。40歳になって「世界の創造主の啓示を受けた」と主張するのは、普通に考えると、少し遅いように思います。年齢的に見て、20歳からのスタートならばわからないでもありませんが、40歳までは特に変わったところにある人ではありませんから、遅くなつてから天才性が開花した印象があります。

それで、預言者と名のりました。「預言」は「予言」とは違います。「言葉を預かる」ということですので、神の言葉（啓示）を預かる人を意味します。その言葉の中に、未来に関する予言が含まれていてもかまわないでしょうけれど、未来がわかるかどうかは主要なポイントではありません。さらに、預かった言葉を広く伝える人を「使徒」と言います。神からメッセージを預かり、それを伝えるとメッセンジャー（使徒）となります。ムハンマドは「神の使徒」と名のりましたが、メッセンジャーであるということは、逆に言えば自身は神でも何でもないということになります。

そのように名のって宗教指導者になるわけですが、

さらに後にはイスラーム国家をつくりました。統治もおこない、政治的な指導者にもなりました。共同体の規則をいろいろと作りしたので、立法機能も果たしました。また「仲裁者」として、弟子たちの間の紛争を調停し、仲よくさせることもしきりにしました。さらに、司法官でもあり、裁判をしました。司法の役割は仲裁とは違い、強制力がありますので、必要に応じて犯罪を罰することもしました。

国をつくつたわけですから、外交もあります。アラビア半島の諸部族や近隣の国々と外交関係を持ちました。そして最後は、戦略家として和戦について立案し、自分自身も剣を取つて戦いました。私たちの持っている宗教家のイメージからいうと、剣の戦いまで自分の手で実践するのは、なかなか理解の難しいところかもしれせん。

ただ、ムハンマドを模範にするのがイスラームだと考えると、戦いはしませんとなると、誰が戦士の模範になるのかということになります。模範であれば、すべてを率先しておこない、範を示さなければならぬ

という考え方もあるかと思えます。「イスラームでは宗教と政治をなぜ分けないのですか」という質問がよくありますが、ムハンマドの模範を見れば、最初から何も分かれていません。宗教はここままで、その先は踏み入れませんという態度は全くありません。

ちなみに、ムハンマドは何でもしただと言っても、彼の事績の中で、1つだけやっていないことがあります。人間生活にこれは欠かせないと思う要素ですが、それが欠けています。何かおわかりでしょうか。それは農業です。彼は自分では、農業に手を染めることはしませんでした。ただし、マディーナ（メディナ）の弟子たちは農民でしたから、イスラーム共同体には農業の要素は十分にあります。

農民と言うと、私たちはどうしても田んぼとか畑とかお米を思い浮かべますが、マディーナではナツメヤシや小麦が主産品でした。いまでも、ナツメヤシを多く産して、有名です。ナツメヤシは、高い木の上に実がなります。農民といっても、高い木に登って収穫をするわけで、私たちの農業のイメージとはずいぶんと

違っています。

一番多い名前

「ムハンマド」という名前ですが、最近、イギリスで男の赤子の名前で一番多いのは「ムハンマド」というニュースが流れました。イギリスのムスリム人口は3〜5%で国全体では20人に1人ぐらいしかいません。それなのに、男児の名前で一番多いのがムハンマドになってしまうのは、非ムスリムはいろいろな名前を付けるのに対して、イスラームでは「ムハンマド」が非常に好まれるためです。名前は他と区別するために付けるものだと思っていると、同じ名前ばかり付けることは理解できません。

昔、電話帳を使って名前の分布を調べたことがあります。「大カイロ」はカイロを中心とするエジプトの首都圏ですが、その大カイロの分厚い電話帳の何千ページの中から電話の所有者の名前を全部調べました。エジプトでは姓が一般的でありませんので、「3世代名」といって、自分の名前・父親の名前・祖父の名前をつ

なげた名前を用います。たとえば、アフマド・アリー・リファアトという名前だとすると、アフマドが本人の名前です。欧米の名前のように、最後に来るリファアトが姓だと思うと、これは祖父の名前なのです。3世代名だと1人につき3つの名前が含まれていますから、名前をたくさん収集できます。

その結果、「ムハンマド」が16%と判明しました。ムハンマドとは「数多く賞賛される人」という意味ですが、同系の派生語で「アフマド（最も賞賛される人）」「マフムード（賞賛される人）」があり、どちらもムハンマドの別名とされています。この3つを合わせると、ムハンマドが4人に1人ということになります。けっこう多い気がしますが、それをカイロ大学の教授に見せると「カイロは都会だから少ない。田舎では半分がムハンマドだろう」との感想でした。その日ホテルに戻って、私のいるフロアで仕事をしている人たちの名前を聞くと、4人いて2人がムハンマドでした。

要するに、イスラーム世界じゅうにムハンマドがいるということですが。国によっては、男児に2つずつ名

前を付ける習慣のあるところもあります。子どもが全員ムハンマドでは区別できませんので、それぞれ2つ名前を付けて、1つは識別用で、もう1つをムハンマドにしてみましょう。そこまでしても、子どもにもムハンマドと名付けたい、そのくらいムハンマドが好きだということです。

さきほど言いましたように3世代名を付けるのですが、電話帳の中には、3世代ともムハンマドという人がいます。歴史の中には、珍しい例に入りますが、14代続けてムハンマドだった事例が出てきます。

ある家で1人ムハンマドがいるとします。そうすると、父親から見れば子どもがムハンマド、兄弟姉妹から見れば、自分の兄なり弟にムハンマドがいることになり、オジから見れば甥がムハンマドということになります。4人に1人ムハンマドがいたら、どこにもムハンマドがない家族は考えられないことになります。

おわかりのように、これは、識別するために名前を付けるといふルールに反しているわけです。私の親友

「音が中心」の言語・文化

にムハンマドという名のエジプト人がいますが、妹さんが結婚したら夫もムハンマドでした。そういうときは、何かあだ名を付けて識別するようにします。

ヨーロッパで「ムハンマド戯画事件」がありました。デンマークの新聞がムハンマドをテロリストのように描いた戯画を掲載して、ムスリムたちが怒ったという事件です。ヨーロッパ側では「言論の自由だ」と言っています。ヨーロッパ側では「言論の自由だ」と言っています。ムハンマドをこれだけ好きな人たちに向かって、言論の自由を主張するあたりは、ヨーロッパ側が他者の文化について感受性に欠けることを示した事件だろうと思います。

そのあたりを理解しないと、ムハンマド問題をめぐるイスラーム圏とヨーロッパのすれ違いが何に起因するのか、わからないかもしれません。いま申し上げたことから言えば、言論の自由をめぐる問題ではありません。

先へ進みます。7世紀のアラビア半島で、ムハンマドが聖典「クルアーン」をもたりました。先ほど申し上げたように、「未来を予言する」予言と、「神の言葉を預かる」預言があつて、ムハンマドの場合は預かるほうの預言者です。預言者をアラビア語で「ナビー」と言いますが、語源は「知らせ」で、知らせを預かるのがナビーの役割です。

このような認識の前提には、唯一神があつて、しかも、その神が言葉を語り、神の言葉を人間に与える、という考え方があります。私たちからは非常に不思議に見えるますが、これはイスラームだけの現象ではありません。中東の「セム的一神教」はいずれもこの考え方を共有しているので、そこではこのことは自明視されています。

イスラームでも「なぜ預言者なるものがあるのか」という議論はなく「誰が預言者か」「ムハンマドが預言者となぜわかるか」という議論だけをします。



イスラームの見方では、人類の祖アダム（アダム）から始まって、人類史にはたくさん預言者がいます。

11世紀、北アフリカの「クルアーン」（大英博物館蔵）。クルアーンを正しく、かつ美しく書くためにアラビア書道が発達した

旧約聖書に登場するアブラハムもモーセも預言者です。モーセは神から律法を授かりました。ダビデは詩篇を授かりました。イエス・キリストも預言者で、福音をもたりました。そして、ムハンマドは預言者としてクルアーンをもたらしました。イスラームは、そういう世界観を前提としています。

ムハンマドはアラブ人でしたから、クルアーンはアラビア語で語られています。聖典名の「クルアーン」は、本来は「朗唱されるもの」「誦まれるもの」を意味します。本、書物ではありません。聖典ですから、今日では本としても印刷していますが、本来は声に出して誦む、覚えて朗唱するものです。イスラーム圏には、クルアーンを全部覚えている人がたくさんいます。

言語のことを少し申し上げたいと思います。朗唱するのがクルアーンですから、モスクに行くと専門家が朗唱しているのを信徒たちが聞いています。耳から聞いて覚えます。子どものためのクルアーン学校が古くからありますが、子どもたちはふつう耳から覚えます。6歳、7歳でクルアーンを全部覚えることも珍しくあ

りません。分量は、クルアーンをふつうの大きさの書物に印刷すると5百ページ程度になります。1冊の本を丸ごと暗記するのと同じですが、子どもは柔軟な頭を持っていきますので、繰り返し聞いていると覚えてしまします。

昔は印刷ではなく写本でしたので、本の数も少なく、基本は耳で聞いて覚え、覚えた人が次の世代に朗誦で伝えるという形で、ずっと伝えてきたわけです。アラブ人ではなくてアラビア語がわからない人、たとえばふつうのマレーシア人にとってアラビア語は外国語ですから、聞いても意味はわかりません。しかし、礼拝の時は聖典の章句を唱えないといけませんし、聖典はアラビア語ですから、礼拝ができるようにいくぶんかの章句を覚えます。

ふつうに考えると、聖典はアラビア語ですから、アラブ人でなければ、すぐには意味がわからないであろうことは想像できます。わからないままに、アラビア語の章句を覚えて、礼拝のときに唱えるのかと言えば、そうなのです。あるいは、少し熱心な人がアラビア文

字だけは覚えて、音としてはクルアーンを声に出して読めるようになるということもあります。最初に紹介したアラビア文字は完全な表音文字ですから、アルファベット28文字を覚えれば発音はできます。その場合、声に出しても意味はわからないということも起きますが、わからなくてもかまわないのです。イスラームのルールでは、聖典をそのままに誦むことが大事とされます。もちろん意味もわかったほうがいいのですが、必須の条件ではありません。

これはよく考えると非常に不思議なことです。なぜ、意味もわからない聖典が広がるのでしょうか。ふつうに考えると、意味がわからない聖典だと広がらないように思えます。キリスト教の聖書の場合は、翻訳が次々と出ていきます。翻訳しても、聖書であることには変わりありません。

イスラームの場合は、アラビア語のクルアーンだけがクルアーンで、翻訳したものはその言語を用いた一種の解釈とみなされます。翻訳したものは礼拝には使えませんし、説教でも必ずアラビア語の原文を引用し

ます。それだと、アラブ人以外は意味がわかりませんので、イスラームの教えを広める障害になるだろうということは容易に想像がつかます。

ところが、現実には、イスラームはこれだけ広がっています。結果から言えば、聖典は翻訳しない、アラビア語原典で読みなさい、意味は分からなくても朗誦が大事です、というやり方は有効だったということになります。翻訳をしないから、聖典と言えばイスラーム世界じゅうで、皆が同じアラビア語のクルアーンを用いています。アラビア語を話せなくても、重要なフレーズはアラビア語で広がっていくことになりました。

ここで、文化の問題として取り上げたいのは言語の役割です。「視覚的イマジネーション」と「聴覚的イマジネーション」の違いの問題を申し上げたいと思います。言語をおおまかに、視覚的な言語と聴覚的な言語に分けることができます。「視覚的」は英語で言えば「ロゴセントリック」。「ロゴ」には図像の意味もあります。要するに文字中心の言語です。「聴覚的」のほうは「フォノセントリック」と言います。フォノは音ですか

ら、音中心の言語です。このような分け方をするとアラビア語は後者の「音中心の言語」の最たるものです。

アラビア語の文字をさつきご覧いただきましたが、完全な表音文字です。表音文字というと「ローマ字も表音文字ではないか」と思われるかもしれませんが、ローマ字の場合は表音文字といっても、英語などでは耳で聞き取っても、スペルを知らないとその単語を書けません。その意味では、完全な表音文字ではありません。完全な表音文字としては、カタカナ、ひらがながよい例だと思います。聞いたことは必ず書けますし、書いたことは全部そのまま発音できます。

アラビア語もこのタイプなのです。日本語のほうは、ひらがなとカタカナだけでは成り立ちません。漢字があつてはじめて日本語として機能します。漢字は「ロゴ」ですから、音だけでは不十分で、見て判別しなければなりません。だから日本語では、視覚障害者の方が学問するのは大変です。

ところが、アラブ圏には目の見えない大学者が昔か

らたくさんいます。なぜかというと、完全な表音文字の場合、書いてあるものと耳で聞いて覚えるものの間には何の違いもないからです。

私の経験で、こんなことがありました。アイユーブ先生というレバノン出身の方がいて、イスラーム学の世界の大家のお一人でした。長い間、アメリカで教鞭をとっていらっしやいましたが、その方の蔵書を京都大学で購入したことがあります。素晴らしい蔵書でした。京都大学が、いま日本で一番たくさんアラビア語図書を所蔵しておりますが、アイユーブ・コレクシオンはその重要な一角を占めております。このコレクシオンには、欧米語の専門書も、いまでは手に入らない貴重なものがたくさん含まれています。

アイユーブ先生は、なぜ蔵書を手放したのでしょうか。学者が蔵書を売るのは、よほどお金に困ったか、その方が亡くなって子どもが要らないとって売るといのがよくあるパターンです。蔵書を売っていただいたときに、アイユーブ先生に日本に来ていただいて講演をお願いしました。休憩のときに、「先生、失礼か

もしませんが、どうして蔵書を手放さったのですか」と、つい好奇心から聞きました。何とお答えになったと思いますか。「一回読んだら、もう要らないから」というのです。つまり、目が不自由な先生なので、ご自分では読めないのですが、誰かに読んでもらった頭に全部入ってしまったって、もう要らないというわけです。講演の際も何を質問しても、「それは何とか先生の何という本の何ページにこう書いてあるから」みたいな感じで、バツとお答えになります。確かに「一度読んだので、もう要らないから」というのが、よくわかりました。アラビア語の文化は、そういう文化なのです。

イスラームが広がるということは、アラビア語のクルアーンが広がるということです。クルアーンを神の言葉だと思うということは、それを耳で聞いたときにイマジネーションが働いて、いきいきとしたイメージが湧いて納得するということになります。「ラー・イラーハ・イッラッラー」は、翻訳すれば「アッラーのほかに神なし」ですが、たぶん、「ラー・イラーハ・イ

「ツラッラー」という音の響きが大事なのだと思います。それを聞くと、イメージが湧いて、神は唯一だということが感じられるのです。ほかのことで、クルアーンのどこかの1節を聞くと、そのイメージがありありと湧くのだと思います。

ところが、日本の文化はそうではありません。逆形のある文字を見ると、パッとわかるわけです。漢字を覚えるのが大変だという説がありますが、漢字のおかげでどれだけすばやく情報がパッと伝達されることか。苦勞して覚える価値があります。

また、仏像は、ロゴセントリックな文化における仏様の像です。目で見て、視覚的イマジネーションでとらえるわけです。像ですから、仏様そのものではないわけですが、仏像を通して、見えない世界がイマジネーションを通して現れてくる、そういう文化です。これは、アラブ人には容易にわかりません。アラブ人が仏像を見ると「なぜ、偶像崇拜をするのか」という質問になつてしまいます。像の向こうに不可視界のイメージが湧くのではなく、人が彫ったモノとして見えてしまう。

あるイメージを見て、そのイメージを超えたものを理解するということになりません。

逆に言うと、私たちは、音を通してイマジネーションが湧く、という世界がわかりにくい。ここには非常に大きな文化の差があります。図像を見て素晴らしいイメージが湧いてくる人たちと、耳で聞くと絵ではとうてい示せないような世界が湧き出てくる人たち。この2つは決定的に違うわけです。私も長年接して、自分なりに消化してきてみて、2つはつくづく違うと思います。

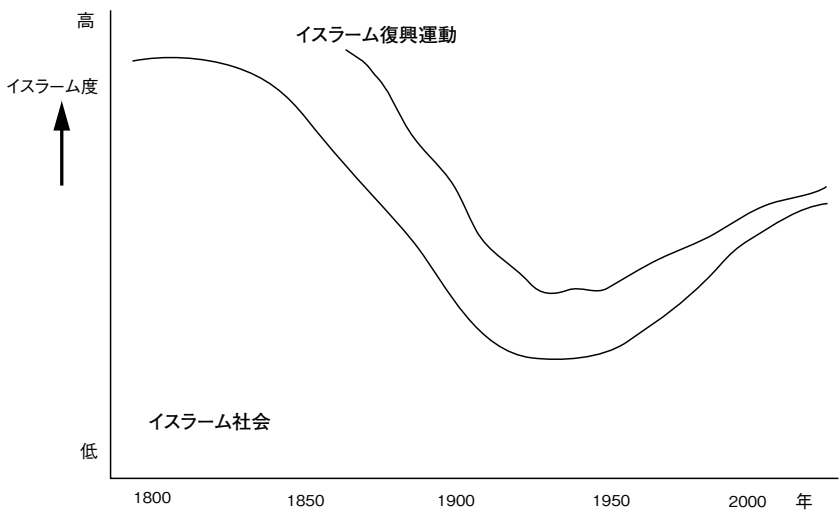
よく「モスクには偶像がない」と言います。「偶像は禁止されているから」というのが標準的な説明です。私はそれだけでは説明できないと思います。モスクという空間は、クルアーンを朗誦するようにつくられていて、音で空間を満たす仕組みなのです。偶像を禁止するとかしないという問題ではなくて、基底の文化が違います。モスクの壁には、幾何学紋様が描かれますが、あれは音のリズムを造形化したものだと思います。聴覚的なイマジネーションから言うと、特定の

像のような形にすると、イメージネーションが濁れてしまいうわけです。この差は、かなり大きなものがあると思います。

西洋近代と邂逅して

そのように独自の文化を持ったイスラームが、いまどうなっているかという現代の話を申し上げます。イスラーム文明は長期にわたって独自の発展を遂げ、近代ではヨーロッパも科学や哲学をイスラーム圏から学びました。しかし、イスラーム社会も近代に入ると、強大なヨーロッパとぶつかります。近代西洋との邂逅がありました。当然ながら19世紀の西洋文明は圧倒的な力を持っていて、イスラーム世界でも皆が「これは太刀打ちできない」と驚きました。日本でもそういうことが起こりました。

そのため近代を取り入れる運動が起きますが、やがて20世紀半ばとなると「イスラーム復興」が起きました。イメージを持っていただくために、ここに図を書きました。左の目盛に「イスラーム度」と書いてあり



イスラーム復興の概念図

ます。イスラーム的な度合いという意味ですが、私がつくった言葉です。「その度合いをどうやって測るのか」と聞かれても答えにくいのですが、ある社会が「イスラーム的である」という度合いを「イスラーム度」で表すことにいたします。

具体的には、たとえばモスクの数、モスクに集まる礼拝者の数など、指標となるようないろいろな要素があります。それを集計したわけではありませんので、このグラフは印象論的なものですが、そのような基準を念頭に考えると、下の実線のように、1850年ごろを境にしてだんだんイスラーム度が下がってきます。西洋化、近代化が進みます。「もはやイスラームの時代ではない」「西洋を取り入れることが一番大事だ」と主張する人も増えてきます。近代主義だけではなく、ナシヨナリズムも出てきます。西洋の文物も取り入れます。服装は大きく変わりました。伝統的な衣服から、いわゆる洋服が普及します。

ところが、それに対して「イスラーム復興」の流れがでてきます。「西洋化するばかりではいけない。自分

たちの文化をもっと大事にしよう」「もっとイスラームを実践しよう」というイスラーム復興運動が出てきます。上の実線がそれにあたります。その動きが出て、その結果イスラーム復興が生じると、「イスラーム度」を上の方に引き上げるわけです。

最後のほうは、この上下の実線の幅が狭まってきています。私の見るところ、イスラーム復興は永久に続くものではありません。「復興」とは、もともと弱まっている、病気があるという状態からの復興なので、十分復興したら健康になって終わるものです。その状態になることを、私は「イスラームの日常化」と言っています。

昨今は、いわゆる「アラブの春」、アラブ諸国での民主化運動が盛んですが、そこではイスラームがあまり表に出ていないと指摘されています。そこから、イスラーム運動の時代が過ぎつつあるのではないかという議論もありますが、表に出ないのは、日常化しているのもう争点ではないからです。エジプトでも、金曜日にモスクに集まって集合礼拝をした後、モスクから

出た人びとがいっせいにデモに行きます。といつて、特にイスラーム的なスローガンを言うわけでもありません。民主化運動は独裁に反対しているのであつて、イスラームの何かを実現するよう要求しているわけではありません。イスラームはごくふつうの日常の部分としてあつて、政治運動の争点ではないということもあるだろうと思います。

イスラーム復興は、なぜ起こるのでしょうか。2つの側面があります。1つは「近代化したから起こる」という面です。イスラーム復興の担い手を見ると、医師やエンジニアなど、近代教育を受けた人がたくさんいます。彼らは近代教育を受けて、社会的にもそれなりの位置にあつて、自分にも自信を持っています。しかし、「私はだれなのか」と考えると、「自分たちは本当はイスラームではないか」とアイデンティティがイスラームに回帰します。

それに対して、「近代化に取り残された」からイスラーム復興という側面もあります。近代化によって、貧富の差が広がったり、発展するところとそうでない

ところで歪みが生まれます。発展から取り残された人たちは、近代的な価値も手に入らなかつたわけで、残されているものは宗教だけという状態が生じます。

そこへ、さきほど申し上げた近代化に成功してイスラーム回帰した医師などが、「イスラーム精神で貧しい人を助けましょう」と現れます。昔はモスクを造ると、クルアーン学校を併設することが多かつたのですが、いまはモスクを造ると、クリニックを併設します。貧しい人たちのための医療施設です。私が調査したところは、だいたい、診察費や薬代が普通の病院の4分の1です。残りは誰が負担しているかというと、喜捨や医師たちのボランティアです。

一方に、近代化に成功した人たちが「再びイスラームを盛り返して頑張りたい」という動きがあり、他方に、近代化に乗り遅れ、国の福祉政策からも取り残されている人たちが、そのような動きを歓迎します。相互の助け合いの中で宗教的な同胞愛が確認され、そのことが次の助け合いを生むというように、復興運動が広がってきたわけです。

イスラーム復興の5大現象

イスラーム復興には、私が5大現象と名付けている要素が5つあります。一番多いのは、モスクの建設です。礼拝堂を造って一緒に礼拝をしましょうという動きが広がります。モスク建設、礼拝の奨励に、クルアーン学校、イスラーム教育を加えることもできます。2番目が、いま申し上げた福祉活動です。喜捨を集めて貧しい人を助けたり、低所得者層向けのクリニックを運営する福祉活動です。孤児院の建設なども含まれます。3番目は、マッカ巡礼です。

欧米や日本では、テロ問題に関心がありますので、イスラーム圏の人たちはテロをどう思っているのかという質問が出ます。私の見るところ、一般の信徒はテロ問題にはあまり関心がありません。誰もが政治に関心があるわけではありません。イスラーム圏の人に、いま何をしたいのかと問えば、何よりも巡礼に関心があると思います。彼らは、一生に一度は巡礼に行きたい。ジャンボジェット機の時代になってから、巡



マッカのカアバ聖殿（高さ14m）で巡礼者が周回の行をおこなう（2008年）。ハッジ（マッカ巡礼）の期間に3百万人もが集まる

礼者は飛躍的に増えました。巡礼はイスラーム暦の巡礼月におこなわれますが、全世界から300万人以上

がマッカに集まって巡礼をします。お金がかかりますから、それぞれお金を貯めて、巡礼に行くのが多くの人の夢になっています。あまりにたくさん集まるために人数の規制がありますので、お金があっても順番待ちになることが多いようです。おそらく、巡礼がイスラーム世界の最大の関心事です。

イスラーム復興を代表する現象の4番目が、イスラーム銀行です。イスラーム銀行は「リバー（利子）」を取りません。利子を取らずになぜ金融が成立するかと言えば、利益を分配するという考え方をします。ふつうは、ビジネスが成功しても失敗しても、利子を銀行に払わないといけません。イスラーム金融では、利益は事業が成功したときにしか生じませんので、損をした時はマイナスになるリスクがあります。イスラーム銀行は、リスクを負う代わりに利益を手にする権利が生じるという発想で営業します。

言いかえると、事業の成否にかかわらず、銀行は元本保証で、事業者がすべてのリスクを負うのは不公平だと考えます。単に利子が聖典で禁じられているかど

うかが問題なわけではなく、公正に儲けるとはどういうことかという経済の倫理観が背景にあります。そのようなイスラーム銀行が、イスラーム復興をしている地域にはたいいていあります。

5番目が、ようやくイスラーム政治です。いわゆる「テロ」の問題やイスラーム革命などですが、政治的なイスラームが生まれるのは一部の国で、イスラーム復興があれば必ず政治問題にもつながるわけではありません。

ところが、この5つが国際社会では、いま申し上げたのとは逆の順に注目を集めます。1番は、テロやイスラーム過激派の問題。次は、イスラーム銀行が非常に増えたので、それを日本でも資金調達に使えないかという関心が高まっています。3番目以降は、巡礼にしても、喜捨にしても、モスク建設にしても、ほとんど関心呼びません。ニュースにもなりません。「きょうも〇〇市の大モスクで、たくさんの方が静かに礼拝を捧げました」では、ニュースになりません。爆弾が一個投げられると大きなニュースになります。イ

スラーム世界の中と、外から見たイスラーム世界では、関心のあり方は全く違っていると云えます。

イスラームという「ソフト・パワー」

イスラームのバイタリティは、なぜ出てくるのでしょうか。20世紀後半に世界的に宗教復興が起きましたが、なんといつてもイスラーム復興が最も勢いがあると思います。そのエネルギーはどこから出てくるかという話を申し上げます。

先ほど触れましたように、近代化に成功したからこそ逆にイスラーム化するという面がありました。イスラーム世界の思想潮流を見ていると、近代主義が非常に広まった時期もありますが、それですべてを解決するわけにはいきませんでした。むしろ、矛盾が深まった面もあります。それを批判する社会主義もありましたが、もはや凋落しています。民族主義も大きく隆盛しましたが、色あせました。それでは資本主義はバラ色かという、冷戦の終焉後に資本主義、自由主義が勝ったという議論がありました。もうそのように楽

天的な認識では通用しません。

このようなさまざまな思想潮流が興亡の中で、長い文化的な伝統を持つイスラームをもう一度、現代思想として試してみましよう、それで貧しい人を助けたらいいのではないですか、という動きが生まれて、それが大きな支持を受けたという面があると思います。つまり、現代世界における「オルタナティブ（代替案）」としてのイスラームです。

もう1つは、理念のシンブルさではないでしょうか。イスラームにも神学があるにはありますが、ふつうの人はそのような問題に関心を持つよりも、きょうお話し申し上げたような生活世界で生きています。「大事なのは実践です」「困っている人を具体的に助けたい」という希求があつて、それが現代社会と合うのだろうと思います。やはり、宗教の実践の仕方にも時代に相応する面がありますので、現代でも宗教的な実践に意味があるということは、大事なポイントかもしれないと思います。

さらに大事なものは、「聖職者がいない」ということで

はないでしょうか。イスラームには、教会や教皇、公会議などはありません。聖職者の位階秩序もありません。そうであれば、イスラームについて決定が必要なときにどのように決めるのか、疑問がわきます。簡単に言えば、ゆつくりとしたコンセンサス形成のメカニズムがあります。イスラーム世界のあちこちで、さまざまに議論して、次第にコンセンサスがまとまってきます。いまのイスラームについての理解も、何百年かの議論を経てできあがったものですから、非常に安定性があります。

とはいえ、新しい問題については、すぐには決まりません。たとえば臓器移植の問題などは、人の「死」をどうとらえるか、先端的な医療技術をどう評価するかなど、複雑な問題です。いわゆるテロの問題にしても新しい問題ですから、いろいろな見方があってすぐには決まりません。コンセンサス形成が必要ですから、いったん決まれば強い力を持ちますが、公会議のように決定する機関がありませんので、とにかく熟議していくしかないのです。それはある意味では、非常に自

由ということです。イスラームでは、法学者などが一般の信徒に命令しているように見えるかもしれませんが、法学者にもいろいろな見解がありますから、どの見解に従うかは信徒の自由です。信徒が従いたいと思いう見解を言う法学者に人気が集まって、その人の意見が強くなるという仕組みがあります。

宗教である以上は、「両極対応」という面もあります。つまり、近代的なものに即応していく、社会のニーズに応えていく極性もありますし、その反対の極で、全く近代とは関わりのない精神性もあります。もちろん近代と相応する精神性もあります。どの時代にも必要な心の癒しというような精神性もあります。イスラーム銀行などは、「利子」を否定するあたりは非近代的に見えますが、今日的な金融システムを構築している点を見ると、きわめて近代的でもあります。両方の極の間で展開しているという強みがあるように思います。

それから、宗教としての「二重底の強み」があるかと思えます。つまり、何かの目標に努力して、必ず成功しなければいけないというルールはないわけです。

宗教である以上は、努力がここで報われてもいいし、「失敗しても、来世がある」という希望もあります。1つがうまくいかなくても、もう1つ底があつて、沈まないようになっていくという気持ちだが、イスラーム世界にはあると思います。

いま申し上げたような、いろいろな点が合わさつて、全体としてバイタリテイの源泉になっています。では、そのバイタリテイが作つているのは、何の力なのでしょうか。

イスラーム世界は非常に勃興しているように見えますが、経済力はありません。一部に産油国もあります。ほとんどが途上国です。しかも、経済水準について世界の途上国の平均値とイスラーム諸国の平均値を比べると、イスラーム諸国のほうが低いです。簡単に言えば、イスラーム世界には貧しい途上国が多いということです。

また、イスラーム世界には軍事同盟はありません。政治力も全くないわけではありませんが、大国に対抗するような政治力はあまりありません。

ということは、イスラーム世界の力は「イスラーム」というものを共有している力、つまりソフト・パワーなのです。貧しい人を助けるとか、正義を求める理念や行動に、皆が共感する、あるいは「イスラームの精神で互いに助け合いましょう」というところから、バイタリテイが出てきます。軍事、政治、あるいは経済などのハード・パワーではありません。

「変電型」の日本文明の使命

最後に、「イスラーム文明と日本文明」という大きな話題をさせていただきたいと思えます。いま『イスラーム 文明と国家の形成』という本を書いているところです（京都大学学術出版会から刊行）。それで日々、文明のことを考えておりますので、一言申し上げたいと思えます。

まず、イスラーム文明に入る前に、日本型の文明について。私は日本文明の専門家ではありませんが、イスラーム文明とは何かを考えることは、私たちの文明は何かを考えることにつながっています。自分たちの

ことを考えずに、外国のことを理解するというわけにはいきません。

1つの問題点として、皆さんにご同意いただけると思いますが、人類文明はいま危機の中にあります。地球的問題群に代表される大きな危機があります。これは西洋近代の発展がもたらしました。西洋文明が世界を制覇して、あらゆる地域に近代がもたらされる中で、危機に逢着したわけです。科学技術にはいい面もたくさんありますが、それを制御しきれないために地球的問題群が生まれ、それに対応できないという現状です。

そのような中で「非西洋としての日本」という観点が有りうると思います。西洋ではないけれども、近代を吸収しつつ近代に耐えて新しいものをつくっていくような文明の力が、そこに内在しています。そのベースになっているのは、そもそも日本が2000年にわたって世界文明を吸収する能力を持ってきたということです。その能力を発揮して、近代においても日本が発展しました。

文明を大まかに分けると、「発電型」と「変電型」が

あると思います。発電型の文明は、独自のものを出していく。発明力や発信力に優れています。日本は変電型です。他の文明のよいものを変電して、汎用型に変えていきます。なぜアジアが発展したかを見ると、ヨーロッパのものを日本が取捨選択して取り入れ、それを日本化・アジア化して、各国に広げたために、すばやく発展が進みました。

その例としてわかりやすいのがマッチです。マッチは非常に便利な文明の利器で、すばやく発火できるわけですが、近代にヨーロッパから入ってきました。日本はそれを明治期にもっと性能のいいものへ10年ほど改良しました。アジアじゅうのマッチが日本製になりました。そうすると、マッチはヨーロッパ原産としてアジアに來しましたが、日本で「変電」されて、もっといいものになったのです。

日本は昔「真似がうまい」と揶揄されていましたが、それは発電型の文明だけを高く評価する言い方です。人類の文明にはいろいろな型がありますから、私がいま「発電型」と「変電型」と申し上げた両方があつて

いいし、あるべきだろうと思います。各々に適した役割があるのです。そうすると、日本は世界文明の受容機であり、変電機としての機能を果たしてきたと言えます。

ヨーロッパ人は西欧の知識・学問がすばらしいと思っ
ているかもしれませんが、私に言わせると「日本における西洋」のほうがもつと純度も普遍性も高いのです。というのは、ヨーロッパでは西洋文明といっても歴史的にいろいろと混ざっています。普遍性をもったものもありますし、実はローカルなものもあります。

ところが、日本が取り入れた西洋文明は、ローカルにしか意味のないものは取り入れないわけですから、ほとんどが普遍的な部分です。そうすると、西洋文明そのものよりも、日本が理解した西洋文明こそ普遍的なのではないかと考えられます。西洋そのものは、普遍もローカルも混在しています。自分たちでは客観的に見る事ができませんから、混在は不可避です。ところが、日本が吸収した西洋の近代文明、あるいはそれ以前から日本が2千年間蓄積してきた文明の知恵は、

日本の変電機にかかって、非常に普遍性が高いものになっています。

問題は、最近の日本は妙に自信がなくなっていること、このことについての関心が薄くなっていることです。しかし、この先たとえ日本が衰えても、この19世紀から20世紀に日本が達成した人類史的な文明の「変電」の意義は残ります。きわめてユニークな成果をあげたのですから、そのことをきちんと評価し、そのプロセスをきちんと理論化しなければ、せっかくの貢献を人類に還元できないと思います。「日本だけが成功しました。あとは皆さん勝手にやってください」では困ると思います。そのことが、まず日本のいまの文明的課題だと思っています。

諸文明の「遺産目録」を活用せよ

次に、その日本が、イスラーム文明とどうつき合うかという論点です。現在の人類文明の危機について、いろいろな考え方があります。物質文明が限界に達しているという面もありますし、自然に対して制御で

きると人間が思い上がったのがいけないという議論もあります。非常にマクロな目で見ると、「産業革命によって遊牧文明が減ってしまった」という問題もあります。

人類の歴史を見ると、古代からいろいろな文明が起こってきました。同じところでずっと同じ文明が続くということは、あまりありません。1つの文明がバイタリティを失うと、その文明の周辺や空白地帯から新しい文明が出てきます。

空白地帯から文明が登場した好例が、イスラーム文明とモンゴル文明です。7世紀のアラビア半島や13世紀の中央アジアは、それまで知られていた文明圏から見ると空白地帯でした。6〜7世紀では西アジアから地中海地域にかけて、それまで対抗していたペルシア文明とビザンツ文明が衰えたときに、文明の空白地帯であったアラビア半島からイスラームが出てきて、新しい文明をつくります。そして、先行する諸文明を吸収し、融合して、イスラーム文明が成立しました。そのようにして、文明の興亡が循環するのが、人類の歴

史と言えます。

ところが、いま地球上に、そういう空白地帯がなくなってしまう。

空白からの文明の登場には、いろいろなケースがあります。アメリカもその1つだろうと思います。もともとアメリカ大陸は先住民がいたわけですが、そこへヨーロッパから移民が来て、わずか2〜3世紀の間に大きなアメリカ文明が成立しました。アメリカ大陸も、世界文明の地図からいうと空白地帯でした。

しかし、もはや空白地帯はなくなりました。あと残っているのは南極大陸ですが、南極から文明が生まれる可能性はほぼありません。

モンゴル文明やイスラーム文明は、遊牧文化をも取り入れた文明です。さきほど「フォノセントリック」という「音で聞く文化」についてお話ししましたが、それは遊牧文化と深く結びついています。遊牧民はモノをたくさん持ち運べませんから、純粋な言語、美しい言語を尊ぶ傾向があつて、それが文明に取り込まれたのがイスラームの場合だと思っています。

そのような文化がいまどれも摩耗して、とにかく都市化していく、産業化していく、工業化していく、というタイプの文明ばかりになってしまったようです。しかもグローバル化したその文明が行き詰まっています。

「なぜヨーロッパだけが近代に達したのか」という議論をかつてよく聞きました。いまでも聞くことがあります。ヨーロッパでは、「私たちが優れているからだ。アジア、アフリカは遅れている」と思いがちですが、文明が自分だけで発展することはありません。グローバルな文明史を見れば、そういうものではありません。イスラーム世界でも近代において「なぜイスラームはヨーロッパに遅れたか」とかいう議論をしてきました。しかし、ふつうに考えると、人類文明は互いにいろいろ助け合って成長するものです。前の文明からもらって、次へいく。同じ文明が自分だけで発展し続けるということはありません。

たとえば、数学、幾何学を見れば、大きな貢献をしたのはギリシアとインドです。数学の発展は、その後

はイスラーム圏でした。そこで発達して、ヨーロッパにも渡り、最後は世界に広がりました。紙にしても、中国で発明され、イスラーム圏で大きく発展して、ヨーロッパ、世界じゅうに広がりました。文明というものは、助け合うわけです。

そして、助け合って次の文明へと進むたびに、パワーが増します。科学技術の水準が高まるのです。人類はずっとそのようにして文明の水準を高めてきました。どんどん進めば、いつかは世界を支配できるほどの技術力を得るわけですが、そのようなパワーに達した瞬間に先頭を進んでいたのが西洋でした。

ところが、現在の危機がこれまでと違うのは、空白地帯から全く新しいものが出てきて、行き詰まりを乗り越ええるという可能性はもはやない点です。そうなる何ができるかということですが、私は人類文明が持っている遺産を点検して使えるものを活用していく、つまり、人類のいろいろな文明的遺産を融合していく道しかないと思います。文明的な遺産を点検するためのリストを、私は「文明の目録」と呼んでいます。

その目録点検をしましょうという提案です。欧米の文明が尽きたとは申しませんが、もうずいぶんと使つてしまい、マイナス面も出てきましたから、まだあまり有効活用されていないインド文明、イスラーム文明、あるいはアフリカ文明に何があるか、もつと調べましょうという意見です。

では、だれがそれを調べるのか。それは、日本の責務ではないかと思えます。日本文明は、世界文明に対する高い感受性があります。ヨーロッパ文明は発電型としては高い機能がありますが、変電型ではありません。いろいろな文明の中から、その長所を見つけ出し、人類のためにどう使えるかを普遍化していくのは、変電型文明を特徴とする日本の役割だろうと思えます。

日本だけとは限りませんが、日本はそれについて優れていることは歴史的に明らかです。そうであれば、イスラーム文明についても、あるいはインド文明も対象となると思いますが、そのような文明の遺産から、いま何が人類に貢献できるのかということを、日本から率先して発信していくことが大事なのではないかと

思います。

「日本語で語られるイスラーム」へ

最後は私の考えている文明論を少し申し上げました。いま日本の社会の中のイスラームを見ると、ムスリムはイスラーム圏から来て在住している人も入れて、日本にはまだ10万人くらいしかいませんが、ようやく日本でもその存在が認知されるようになってきたように思えます。

私の考えでは、私たちのようにイスラームを研究している者も、イスラーム圏から来て日本に在住している人たちも、これからの課題は「日本語でイスラームを語る」ことができるかどうかです。ただ翻訳すればいいわけではありません。キリスト教も、私たちがいま「キリスト教というのはこうですよ」と語ることができるのは、明治以来、キリスト教を表現するためのポキヤブラリーが創出されてきたからです。

それと比較して考えると、いまイスラームについてどう語るのか。アラビア文字をカタカナにすることも

必要かもしれませんが、あまりすると、カタカナばかりで意味のわからない日本語になってしまいます。イスラームの考えを日本語的に表現するためにはどうすべきなのか、イスラームをうまく表現できて、なおかつ日本語として自然でこなれたものになるようなボキヤブラリーはまだ足りていません。私自身も一生懸命、適切な表現をつくるように努力していますが、まだ十分ではありません。

世界人口の4分の1ほどを占めている日本の外のイスラームについても、日本社会の中のイスラームについても、それを理解できるような日本語の語彙を増やし、ボキヤブラリーを磨いていくことが、現在の最大の課題かと思っております。

質疑応答より

【質問者H氏】日本に戦後アメリカの文化・文明がたくさん入ってきたときに、私たちはアメ車に憧れて、アメリカのホームドラマに憧れて、ファッションに憧れました。そういうものが「カッコいい」という意識で

した。

そこで、私たちから見るとイスラームの国というのは、どうも皆、同じような恰好をして——みたいなイメージがありますが、イスラームにおけるカッコよさとか、そういうものがあるのでしょうか。

【小杉講師】おっしゃるとおり、文明に憧れるというのには、その文明に力があるときです。日本とイスラームの関係で言うと、イスラームが一番パワーのあった時代には関係が遠かったわけです。

そこで、何がカッコいいかというときに、いろいろな考え方があって、私が思うのは、きょうもお話ししたような「一緒に仲よくご飯を食べる」というのがカッコいいのではないのでしょうか。東日本大震災でも、東京のモスクの皆さん方がずいぶん東北に炊き出しに行っています。

宗教者が東北で何ができるのかという問いがありますが、イスラーム圏出身の人は、何ができるかという「ご飯をどうぞ」と言います。それが宗教なのですかと聞くと、私たちにとってはこれが宗教です、と答

えるそうです。さきほど申し上げたように、皆でご飯を食べ、食べるものがない人には分ける、というのがイスラーム的なのです。日本も少し個人主義が強くなって、それにはいい面もありますが、悪い面も出て来ています。困っている人がいたら、皆で仲よくご飯食べましょう、寂しかったら、ご飯を一緒に食べて話をしよう、という共同体的な考え方も意味があると思います。

イスラームに「ムサーハバ」という概念があります。簡単に言えば、「一緒にいる」ことを指します。「友達」とは何かと尋ねると、「ムサーハバ」と答えます。一緒にいるのが友人ではないかというのです。観念的にではなく、実際に一緒にいる、そばにいるという意味です。「友達だからそばにいるね」というスタイルはカッコいいのではないのでしょうか。

【日氏】では、イスラーム圏の人にとって他の文明、たとえば西洋とか東洋とか、そういうものに憧れるとか、他のファッションに魅かれるとか、ビートルズが聴きたいとか、アメリカ映画がカッコいいとか、こういう

ような精神構造があるかどうか、教えていただきたいのですが。

【小杉講師】そのような憧れなどは強いと思います。今回の「アラブの春」でも、若者たちが皆ネットや携帯を使って活動しています。欧米の流行の最先端を取り入れているわけです。女性のファッションにしても、女性だけの場所では上着を脱ぎますが、そうすると最新のファッションを身につけているそうです。やたらに見せびらかさないという文化があるのでわかりにくいのですが、実は最も流行のブランドをつけているわけです。

映画も、アメリカ映画は人気があります。民主化すると中東で反米が広がるのではないかとという危惧がありますが、中東の反米は基本的にアメリカの外交政策に対する反対です。パレスチナ人をいじめるのは許せないという気持ちが非常に強いですが、それはアメリカ文化に対する反発では全くありません。

古い時代を考えても、同じような例はいくつもあります。イスラームが勃興したすぐ後の時代でも、イス

ラームを大事にする側面はもちろんありましたが、それと同時に、ギリシア哲学が非常に優れている、とほとんど取り入れました。

いまも同じです。最先端のものを求める姿勢は強いと思います。西洋文明のこういふところはすごい、というのは素直に認めるわけです。日本にもたくさん留学生が来ていますが、先端的な文明を吸収したいからです。

それにもかかわらず、やはり「文化は、自分たちの宗教が一番いいのです」といいますから、そこが面白いと思います。宗教については自分を大事にするもの、そうでない部分では一番カッコいいものがほしい、最先端が好き、という気持ちが非常に強いように見えます。

【質問者T氏】イスラームでは、宗教指導者と政治指導者が一緒だとか、そういう指導者が何かを言ったら皆が一斉に従うようなイメージのニュースがすごく多いですが、先生のお話を聞いて、全然違うと思いました。

宗教指導者と政治指導者の関係、その辺がいま一步よくわかりませんので、教えていただきたいと思います。

【講師】1つは、きょうも申し上げましたように、イスラームのモデルから言うと、ここが宗教、ここが政治という区別はありません。だから、宗教指導者でも政治的な発言をするし、政治指導者でも宗教のことをいろいろ言うという問題があると思います。日本から見ると、やはりそこは理解しにくいので強調されがちです。

ただ、そうは言っても、国によって事情は違います。イスラームを誰が代表するかは、コンセンサスによるわけですが、絶対的なルールはありません。サウディアラビアですと、やはり国王が代表ということになります、王権者ですから政治指導者です。イランでは、最高指導者は法学者ですから、どちらかに分ければ宗教指導者が政治に介入している形です。そのような国では、法学者が「こうだ!」と言うと国民が従うように見えます。実際には、最高指導者を批判する法学者もいますし、法学者に素直に従わない人もいます。本

当は、特定のイスラーム法学者の発言に皆が従わなければいけないというものではありません。法学者はたくさんいますので、いろいろな見解が出されます。

ただ、逆に考えると、法学者でトップに立つような人は、そもそも人気があるからトップに立てるわけです。皆が話を聞きたくない人はトップまではいきません。外から見ていると、トップが発言すると皆が従うので、強制されているのではないかと疑いたくなりますが、そもそも皆が従うような人だという面もあります。

それと、もう1つは、一見すると一枚岩のように意見が決まるときも、裏では議論が盛んにされています。ただ、国会で議論するとか、政党がマニフェストを示すのであればわかりやすいのですが、法学者の議論は国会のように外から見えるものではありませんし、サウディアラビアでは議会もありません。しかし、国王にしても王子や知事でも、人びとと直接会う場を持っています。湾岸の国でもディーワーニーヤという集会があります。社会的な有力者や政治指導者がそのよう

な半ばプライベートで半ばパブリックな集会を開いて、そこで皆が語りあって、いろいろな声が届くという機会があります。ところが、他の国からは「国会がないから、これは専制じゃないか」と言われてしまいます。

ただし、私の率直な意見を申し上げると、そのようなチャネルがあると云っても、現状はやはり十分ではないと思います。直接面会できる場に陳情に行つて、知事が「わかった、やつてあげよう」ということだけでは、システムとして足りないだろうと思います。社会もどんどん変容していますから、もう少し新しいチャネルを考えなければいけないのではないのでしょうか。

これまでのやり方はいい面もありますが、やはり近代化で社会が変わってきましたので、伝統的なものだけではうまくいかない面が出てきて、その矛盾が出てきます。西洋化すればよい、近代的な民主主義を導入すればよいというのは、少し時代遅れの考えで、もう通用しないとは思いますが、では固有の文化を生かした新しい方式はどうするのか、それがこれからのイス

ラーム圏の課題です。イスラーム的であり同時に近代的というか、現代社会の要請にも応えられるような、新しい仕組みや社会のあり方が求められるでしょう。

イスラーム圏も、19世紀の終わりから百年ぐらいの間は欧米のものをどんどん取り入れてやってきましたが、いまは、欧米自体もそんなにはうまくいっていないわけです。そうすると、やはり単純に取り入れるだけでは不十分で、自分の文化、自分の社会に合った現代的なものが必要です。

その必要なものは国や社会のあり方が違うと自ずと違ってくる。イスラームはひとつであるにしても、実際の適応の仕方は国ごとに、社会ごとにそれぞれでしょう。独裁が長く続きすぎた国では、いま民主化運動が広がっていますが、民衆の声が高くなったとして、それでこれからどう変わっていくかが課題です。

イスラーム全体について言えば、何度も申し上げますが、変わると言っても、コンセンサスが大事ですので、一気にひっくり返るような変わり方は想像できません。徐々に変わって行って、皆が納得してコンセンサスに

達すると、安定するというかと思えます。現代的な課題について、イスラームとイスラーム世界がどう変わっていくのか、これからもいろいろ見ていきたいと思えます。

(こすぎ やすし／京都大学教授)

(2011年10月27日、東京都新宿区の日本青年館で行われた講演に加筆していただいたものです)